

第68回情報・システム研究機構国立極地研究所運営会議議事要録

日 時 令和6年6月14日（金）10：00～11：33

場 所 国立極地研究所 中会議室及びZoom

出席者 阿部委員、池原委員、井関委員、香川委員、佐藤委員、塩川委員、森本委員、山本委員、渡部潤一委員、伊村委員、榎本委員、堤委員、外田委員、平譚委員、川村委員、猪上委員

陪席者 野木所長、田村所長補佐、宮本南極観測センターマネージャー、熊谷広報室長、沼田管理部長、大西財務課長、坂本総務企画課長、瀬戸口総務企画係長、中山総務企画係員

（開会）

沼田管理部長から、出席者は委員18名のうち16名であり、会議の成立要件である定足数（委員の過半数の出席）を充たしていることが報告された後、開会が宣言された。

（所長挨拶）

野木所長から挨拶があり、第11期の初回であることから、運営会議の役割・任務について説明があった。

（新規委員挨拶）

沼田管理部長から新規委員2名が紹介され、それぞれ挨拶があった。

（議長及び副議長の選出）

野木所長から今期の議長・副議長選出の方針について説明があり、規則に則り委員による互選を行った結果、議長に伊村委員、副議長に森本委員が選出され、それぞれ挨拶があった。

（資料の確認）

坂本総務企画課長から、資料及び前回議事要録について説明があった。

（審議事項）

1. 室名の変更に伴う組織運営規則の一部改正について

野木所長から、資料1に基づき、「男女共同参画推進室」を「ダイバーシティ・インクルージョン推進室」へ名称変更することについて説明があった。委員から、時流に沿っており積極的に行うのが良いとの発言があった。また、室名の英語名称について質問があり、室員である猪上委員より「Office for Diversity and Inclusion」である旨、回答があった。審議の結果、承認された。

(報告事項)

1. 特任教員及び特任研究員の人事について

伊村議長から、資料2に基づき報告があった。

2. 客員教員の人事について

伊村議長から、資料3に基づき報告があった。

3. 令和7年度概算要求について

沼田管理部長から、資料4に基づき報告があり、以下の質疑応答があった。

- ・一部金額の誤りについて指摘があり、その場で修正された。
- ・拡充要求が通らなくても KPI は達成可能という認識で良いか。
→そのとおりである。
- ・EISCAT_3D レーダーの要求額が3年間同額となっており、実際には値上がりしていることが考えられるが問題ないか。
→再確認する。
- ・モデリング部門の設立は国際的な時流から見ると良い時期での検討であるが、極地研単独では難しいため、共同利用・共同研究を活用し、国際的な問題に対応できると良い。具体的な方針、陣容、設備についてどのように考えているか、また、どのような支援が必要か。
→各方面の研究機関・大学と連携し成果を上げたいと考えている。豊富なデータを繋げる人員の採用が必要なため相談していきたい。また、機構内の AI や DX の分野を連携させて次の展開を考えていきたい。

4. 共同研究及び研究活動について

伊村議長から、資料5に基づき報告があり、以下の発言及び質疑応答があった。

- ・紹介された研究活動の中には、科学だけでなく文系的な視点での解析があるなど広がりがあり良い。
- ・外部資金獲得において成果を上げているが、研究所として特別な取り組みがあったのか。

→ある程度は周期的な波やタイミング等の要因があるが、研究力強化の一環として外部資金獲得のための申請書のブラッシュアップに力を入れており、その成果もあると考えている。

- ・特別共同研究が新たに始まったが、全体的な共同研究の件数の増減はいかがか。共同研究は極地研の応援団になるため、数を増やしていけると良い。

→体制の変更に伴いリセットして新規としてスタートしたため今年度は件数が減っているが、来年度は継続も含め件数は増えると想定している。

5. 南極地域観測事業について

伊村議長から、資料6に基づき報告があった。

6. 北極研究について

榎本委員から、資料7に基づき報告があった。若手研究者の交流事業には大学院生も参加可能かとの質問があり、学位を取得した研究者が対象となっているが研究所や研究グループ間では大学院生の交流もあるとの回答があった。

7. 国際極域・地球環境研究推進センターの活動について

野木センター長から、資料8に基づき報告があった。

8. 総合研究大学院大学先端学術院極域科学コースの現況について

平譚委員から、資料9に基づき報告があった。文科省の強い方針もあり大学では博士後期学生に対する返還不要の奨学金や研究者としての雇用等の支援を充実させているが、フルサポートの支援を受けている大学院生がどれくらいいるかとの質問があり、総研大の特別研究員事業により現在2名の学生がフルサポートを受けているとの回答があった。

(意見交換)

各委員から、極地研に対する要望や助言を含め、以下のとおり発言があった。

- ・博士課程の学生に対してフルサポートがないのは先進国では日本くらいである。博士課程の人材育成に関して、各機関が声を上げていくことが必要である。
- ・他機関との協力体制を強化しながら極域科学を盛り上げてほしい。
- ・近年のエネルギー価格の高騰、円安等の影響で厳しい運営が続いている。国立大学の苦しい状況については、国大協からも声明が出されているが、理解、支援をお願いしたい。
- ・観測をサポートできる活動ができるよう、工学的、技術的に困っていることがあれば発信してほしい。

- ・極地研名誉教授の内藤靖彦先生が山階鳥類研究所より山階芳麿賞を受賞されることが決定した。
- ・国際極域・地球環境研究推進センター（IPERC）のひとつの目玉事業と思われる特別共同研究が始まっているが、これからはどういうふうに特別か（例えば分野融合、国際共同、南極集中観測等を重点的にサポートする等）を押し出していくと、成果としてアピールでき、概算要求にもつながるのではないか。
→アピールできるように検討する。
- ・研究所としてのプレスリリースリストがなかったので資料に含めていただきたい。
→前回会議から間もないため今回は省略したが、タイミングをみてまとめて報告する予定である。
- ・南極観測で長い間検討されていたしらせの二往復がようやく実現することとなり、越冬隊の出張期間を短くできるほか、海洋観測にもメリットがある。また、南極観測の予算が限られる中、パラドロップ（飛行機から投下して輸送する方法）等の新しい試みもあり、工夫して南極観測を維持していることが伺える。
- ・PANSY や EISCAT_3D レーダーの成果に期待している。観測・研究設備の予算不足が大きな問題になってきているが、力を合わせていきたい。
- ・先日、日本で低緯度オーロラが観測されたが、名古屋大学の ISEE や極地研のビジビリティを高めるイベントであった。特に片岡准教授は市民天文学的なデータを集め、世間の幅広い興味・関心を救い上げており、興味を持った子供たちが極地研に見学に来ることにもつながるのではないか。このような活動も広報の一環として進めると良い。

(閉会)

議長から閉会が宣言された。

(次回開催予定の確認)

沼田管理部長から、次回運営会議日程について通知があった。

以上